

未来の子どもたちのために私たちができること



桑原 順子

福岡工業大学工学部生命環境科学科
[811-0295] 福岡市東区和白東3-30-1
准教授, 博士 (工学).
専門は生体高分子化学, コロイド化学.
j-kuwahara@fit.ac.jp
www.fit.ac.jp/site/leac/

このたびは、貴重な執筆の機会をいただきありがとうございます。2年ほど前に室蘭工業大学での男女共同参画事業の関係でお世話になりました貞許礼子先生からのご推薦を受け、レアなケースの経歴にはなりますが、男女問わず、教育・研究を業とする皆様にとってご参考になれば幸いです。

私は博士の学位取得後に大学での教育者・研究者として12年、そのうち母親業も兼ねながら11年過ごしてきました。今、あらためて振り返ってみると、ほぼ研究者の期間＝母親の期間です。ちょうど第1子を出産した2006年頃は、「男女共同参画」という言葉がようやく社会にも浸透し始めた頃でした。前任校の私立大学に勤務していた当時、身近なロールモデルもなく、情報不足に困り果てていました。藁にもすがる思いで情報を探していたところ、近隣にある国立大学の男女共同参画関連部署のHPが目にとまり、すぐにメーリングリストへ登録させていただいた記憶があります。女性研究者のロールモデル紹介やセミナー開催、育休復帰後教員の研究補助員の支援制度などをHPで紹介されていました。実際にはその国立大学内の教職員しか利用できない支援やセミナーがほとんどでしたが、HPを閲覧するだけでも同じような境遇の女性研究者がいるんだと、とても励みになり、産後の不安な気持ちも救われました。あのような部署の存在は、当時の私にとってたいへん有り難い存在でした。

あれから11年。「ワーク・ライフ・バランス」、「ダイバーシティ」など頻繁にメディアで目にするようになり、女性研究者のロールモデルも随分増えてきたと実感しています。11年の間に、幸運にも現在の勤務先に採用いただけたこと、その後、第2子にも恵まれ、出産できたことは嬉しい出来事でした。とくに、公募先はかかなり範囲を広げて探し、幾度となくチャレンジしました。さまざまな教育・研究機関の方々と面接でお話をする機会がありましたが、面接を通して自分のセールスポイントやスキルを整理することができ、また、面接官からの質問を受けるたびに、各教育・研究機関で+αの求められるスキルがまったく異なることがわかりま

した。公募にあたり、研究業績は最も重要な加点ポイントなのかもしれませんが、+αの自分のスキルや伝えたい熱意を表現することも大切なかもしれません。私は、約半年の産休・育休中のときに自分を見つめ直す時間を取れたことが幸いでした。生まれたばかりのわが子を目の前に、未来の子どもたちへ豊かな社会を残すためにいったい私に何ができるのだろうか、と考え直したところ、それまでとは違った視点での研究テーマが湧いてきたと記憶しています。結果的に現在の所属先とその後の研究テーマにつながったように思います。

理工系分野を取り巻く教育環境を振り返ると、20年以上前に比べて女子の進学率は格段に増えました。大学、大学院などの高等教育機関で男女平等に学ぶ機会が与えられている以上、今のような現状になるのは必然的なのかもしれません。6、7年前から、自身の経験を活かし、男女共同参画のイベントを企画したり、講演や執筆の依頼があった際には極力引き受けたりしてまいりました。また、最近では、科学を次の世代へ広めていくためにライフワーク的な取り組みを行っています。教職課程の学部学生が主体となり、授業、実習で学んだ知識と技術を本学付属高校生に教える「i-STEM」という事業です。科学・技術・工学・数学の教育分野の総称であるSTEM教育に情報 (Information) のiをつけたわれわれの造語です。理工系分野特有の技術の伝承は、代々受け継がれるべきものである、という思いがあります。近い将来、i-STEMは分野の垣根を超えた相互理解が必要不可欠になると考えています。このような取り組みは私一人では決して成し得ることができませんでしたが、本学を構成する3学部 (工・情報工・社会環境 (文系)) の教員有志により3年前から試行的に始めることができました。まだまだ発展途上ではありますが、理工系分野の裾野拡大へ向けた取り組みに挑戦していきたいと考えています。

それにしても、私の母親業はあと10年くらい続くわけでした。「仕事と私事」、とくに「私事」の課題は、わが子の成長とともに今後も変化し続けていくだろうと思っています。